

大磯 暮らし

TAKE
FREE
VOL.
01

2017



さあ、大磯で
君の物語をはじめよう

特集

私の大磯。

大磯の暮らしを楽しむ6人のインタビュー

大磯町ってどんなまち？

大磯暮らしを楽しむための9つの価値観

大磯町を知ろう！

特集 私の大磯。

日本初の海水浴場として知られ、かつて歴代の総理8名が暮らしていた大磯。その頃から芸術家や作家も移り住み、文化を感じられる町です。この特集では、海も山もある大磯の魅力をとことん満喫し、人や地域のつながりを大切に暮らす方々に、その暮らしぶりをうかがいました。



01

農家
渡邊幹
watanabe

大磯で「農太郎」の愛称で親しまれる無農薬栽培農家の渡邊幹さん。現代美術作家の沙矢香さんと結婚し、2歳になる新君のお父さんでもあります。地産地消を大切にする農的暮らしとは?

「農家と現代美術作家の夫婦ですから、生活はそこぶる不安定です(笑)。でも、自分でも一体何がそんなに楽しいのか、わからないくらい、毎日が楽しいです」そう語るのは、冗談とも本気ともつかない、独特の語り口調で、人を笑いの渦に巻き込む農家の「たいやうまるかじり」の農太郎さん。沙矢香さんと結婚し、息子の新君が生まれてからは、「激カワ」と言つて、子煩惱ぶりを發揮している。沙矢香さんが新君を連れて畑になると、「新、新」とかけ寄り、3人で仲良く散歩することも。「野菜を作り、販売して、お客様においしいと喜んでもらう。これ以上良い仕事は、あるのかな?」そう思い、選んだ道が農家だった。大磯のサラリーマン家庭で育つたため、畠探しから販売先まで一から切り開きつつ、無農薬野菜を育て始めた。味は都内で有名な自然食系レストランのシェフから「会つて話を聞きたい」と連絡をもらうほどのおいしさで、野菜の味がギュッと詰まつて濃い。販売先是農太郎さんいわく、「畠が歩いて移動したりしない」ので、地元で消費がモットー。大磯港で開かれる「大磯市」や「港の直売所」に出店し、多くの人の紹介により販路が拡大している。「せっかくなら、その町でしか買えない地元の食べ物が気軽に買える町に住みたくないですか?僕の野菜を食べててくれたお客様に、大磯の生活は豊かなだと感じてもうしたら、最高だなあ」町に幸せを運ぶ農家がここに。



(右)大磯の遊休農地を利用し、お米を育て日本酒を作るなど田舎暮らしを体験できる「大磯農園」。農業指導リーダーも務める。大磯周辺や都会からやってきた参加者などに指導している。(中)3月~2歳になった長男の新君。お父さんの畠が公園代わり。土や草を触って好奇心いっぱいに遊ぶ。農家の特権で、3食とも家族そろって自宅で食べる。(左)農太郎さんが育てた野菜。葉がビンとして生命力の強さを感じる。

大磯でアートが発表できる場を盛り上げたい。



(上)『大磯うつわの日』で展示したお米でつくられた器の一部。手作業で米に両面テープをつけて貼り付ける。(中)鮮やかなピンク色をした紅芯大根。日々の食事には、もちろん野菜がいっぱい並ぶ。(下)ふたりで一緒に調理することが多い。

築約50年の家を改築した、自宅兼アトリエで活動する沙矢香さん。陽射しが気持ちよく差し込む、とつておきの部屋にレトロな机とイスを置き、作業場にしている。数年前、引っ越しを決めた時は、前の持ち主の荷物がどつり残り、タンスの引き出しから「おっ!」と驚くような物も次々に発見され、家中は「んやわんや」。床や壁の張り替え作業もあつたけれど、町内で活動する沙矢香さんの作家仲間や、農太郎さんの農業関係者などが次々に改装作業を楽しんで手伝いに来てくれたおかげで、人が多く集まる空間に生まれ変わった。

大学時代、新潟の「大地の芸術祭」のボランティアで作品を見て、「作品で人を感動させるのはいいな。作家として生きていきたい」と決めた沙矢香さん。その情熱は今も衰えず、新君が産まれてからは、農太郎さんやご両親にみてもらつて1日数時間で作品作りに没頭している。昨年10月には、沙矢香さんの作家仲間が実行委員会を務める、器をテーマにした年に一度のイベント『大磯うつわの日』で作品を発表。開催直前は、ドタバタだったが、町内の開催で、多くの知り合いに来てもらえた。

「会場に、もくくん(農太郎さん)のお野菜のお客さんが来てくれたり、子供がいたり、美術美術していない感じが、新鮮でした」と嬉しそうに語る沙矢香さん。

実行委員会側にも仲間入りし、開催に向けて準備も進める。「器アートをコラボさせて、大磯でアートが発表できる場を盛り上げられるよう頑張りたいです」作家が活躍しやすい町へ、歩。

現代美術作家
石塚沙矢香
さん
(本名: 渡邊沙矢香さん)
sayaka ishizuka

02



石塚沙矢香:
1980年、静岡生まれ、横浜、広島育ち。女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻卒業後、現代美術作家の道へ。「大地の芸術祭」越後妻有アートトリエンナーレや「瀬戸内国際芸術祭」のほか、上海での個展経験を持つ。

作家が活躍しやすい町へ、歩。
作家が活躍しやすい町へ、歩。
作家が活躍しやすい町へ、歩。
作家が活躍しやすい町へ、歩。
作家が活躍しやすい町へ、歩。

「お母さんも、一緒に引きなよ！」 浜辺で誘われ、地引網の世界に飛びこみました。

渡辺道子さんが、大磯へ住む

15年以上も前

ようになったのは、その当時、小学1年生だった息子くんが投げ釣りにハマり、日の出前に海へ行きたいと言ふので、一緒に出かけた。すると、浜辺には地引網を引っ張るグループがいて、何度も海へ行くつちに、「お母さんも、一緒に引きなよ！」と説かれた。それがきっかけで、漁とは無縁だった渡辺さんが、週末、地引網をするようになつた。

「浜では肩書きや年齢は、まったく関係ない。それが私は心地良かつたですね」

漁を終えると、獲った魚はみんなで分ける。基本は、みんなおいしい魚を食べることができたらそれでいい。それまで肉食だった渡辺さんの食生活は、獲れたての魚の味を知り、大きく変わつた。

「海で獲れたてのお魚は、本当においしいですよ！生シラスにキアシはもちろん、サバだって、獲つてすぐは、まったく臭みがない。舌だけは、肥えちゃいました」

『台舟』の人々との偶然の出会いから、町内の交友関係も広がり、大磯での暮らしは格段に楽しくなつた。仲間の烟を手伝わせてもらった、オリーブの樹を育てるなど、やりたいことも増え続け、時間がまつたく足りないという。

「大磯は自分の足で歩けば歩くほどおもしろいことが見つかる町だと思います。人も景色も発見の宝庫で、私にとっては町全体が、『大磯ワンダーランド』です」と好奇心いっぱいの渡辺さん。

人懐こくて品のある笑顔が輝いた。

渡辺道子さんは、大磯へ住むようになったのは、その当時、小学1年生だった息子くんが投げ釣りにハマり、日の出前に海へ行きたいと言ふので、一緒に出かけた。すると、浜辺には地引網を引っ張るグループがいて、何度も海へ行くつちに、「お母さんも、一緒に引きなよ！」と説かれた。それがきっかけで、漁とは無縁だった渡辺さんが、週末、地引網をするようになつた。

「浜では肩書きや年齢は、まったく関係ない。それが私は心地良かつたですね」

漁を終えると、獲った魚はみんなで分ける。基本は、みんなでおいしい魚を食べることができたらそれでいい。それまで肉食だった渡辺さんの食生活は、獲れたての魚の味を知り、大きく変わつた。

「海で獲れたてのお魚は、本当においしいですよ！生シラスにキアシはもちろん、サバだって、獲つてすぐは、まったく臭みがない。舌だけは、肥えちゃいました」

『台舟』の人々との偶然の出会いから、町内の交友関係も広がり、大磯での暮らしは格段に楽しくなつた。仲間の烟を手伝わせてもらった、オリーブの樹を育てるなど、やりたいことも増え続け、時間がまつなく足りないという。

「大磯は自分の足で歩けば歩くほどおもしろいことが見つかる町だと思います。人も景色も発見の宝庫で、私にとっては町全体が、『大磯ワンダーランド』です」と好奇心いっぱいの渡辺さん。

人懐こくて品のある笑顔が輝いた。

03 | 主婦 渡辺道子さん michiko watanabe



渡辺道子：
1958年東京生まれ、横浜育ち。14年間家族でニューヨークに暮らし、2000年に帰国、大磯へ。31歳を筆頭とする3人のお母さん。『台舟』のメンバー、『大磯オーリーブ』『谷戸川渓谷をきれいにする会』代表。



(右下) 西小磯が拠点の『台舟』のメンバー。60～70代の男性を中心活動しているが、最近では若い男女も集まっている。興味があれば、誰でも参加できる。(左上) 地引網を引っ張る様子。(左下) 大漁だった獲れたてのシラス。



04 | デザイナー 高田麦太さん mugita takada

「僕らの小さい頃は、変なおじさんがないんですよ。竹で竹馬を作ったり、本格的な紙飛行機の作り方を教えてくれる。でも、今はどこにもいないじゃない？僕はそういうおじさんになりたいね」

そう語るのは、笑顔が眩しく、ちいわるオヤジといった雰囲気の高田麦太さん。都内の空間デザインで働き、全国の大型商業施設や脱落者統出の有名なお化け屋敷など、エンタメ系施設を中心とした空間デザインを手がける。

「人を驚かせるのが好き」という高田さんの自宅の裏山は、小学生の息子さんの友だちの間で『タカラーランド』と呼ばれている。

「（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。「金曜の夜から、リゾートにいる気分ですかから。週7日のうち3日は、リゾートにいる。東京で働くのは、暇つぶしだね」大磯の新別荘地エリアで暮らす、高田さん。かっこよすぎます。

山の斜面に建つツリーハウスに、ターザンロープ……子どもたちの間で『タカラーランド』と呼ばれ、遊び場になっている家がある。

そこには子どもたちを惹きつける「親分」がいました。

04 | 息子のサツカーチームの子どもたちに “親分”と呼ばれています（笑）。

山の斜面に造られた細く手すりのない階段。その先には子供の心をくすぐる、ツリーハウスや海が見える野外テラス、ターザンロープなどがあり、彼らにとって絶好の遊び場なのだ。すべて高田さんの手作りで、「親分、新しいアートラクションを増やしてよ！」とせがまれ、その要望に応えてきた。

独身時代は、「イケイケ、ドンドン」。自分のことだけを考える時代を生きちゃつたが、今では、3人のお父さん。自分の子どもだけではなく、町の子どもたためのボランティア活動に積極的に参加している。大磯の海を楽しんでもらう

「いそっこの教室」では、大磯

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。「金曜の夜から、リゾートにいる気分ですかから。週7日のうち3日は、リゾートにいる。東京で働くのは、暇つぶしだね」大磯の新別荘地エリアで暮らす、高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

気分ですかから。週7日のうち3日

は、リゾートにいる。東京で働く

のは、暇つぶしだね」

大磯の新別荘地エリアで暮らす、

高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

気分ですかから。週7日のうち3日

は、リゾートにいる。東京で働く

のは、暇つぶしだね」

大磯の新別荘地エリアで暮らす、

高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

気分ですかから。週7日のうち3日

は、リゾートにいる。東京で働く

のは、暇つぶしだね」

大磯の新別荘地エリアで暮らす、

高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

気分ですかから。週7日のうち3日

は、リゾートにいる。東京で働く

のは、暇つぶしだね」

大磯の新別荘地エリアで暮らす、

高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

気分ですかから。週7日のうち3日

は、リゾートにいる。東京で働く

のは、暇つぶしだね」

大磯の新別荘地エリアで暮らす、

高田さん。かっこよすぎます。

（上）みかん畑にいる高田麦太さん。12組の家族と共に、西小磯の約1000坪の農地を借り、農業を通じて、子どもたちが地球環境や生きる力を学べる場として活用している。（中）山の斜面に建つツリーハウス。約10年前、お正月の1週間ほどで、高田さんが制作した。大工経験はないが、昔から得意。（右下）『タカラーランド』の人気アトラクション。過去には、山の崖っぷちに海に向かって漕げるよう設計した「恐怖のブランコ」を造り、「本当に飛んでいくんじゃないかな」「あまりにも怖い」と不評で、解体したこともある。（左下）自宅では薪ストーブを使っている。薪は町内で調達。庭で薪割りし、ストックしている。

に住むラフティング世界チャンピオン経験を持つ知人を説いて、一緒に活動してもらつた。また、青少年指導員の副会長として、夜に町内にある標高165メートルの高麗山へ行き、電気を消し、無言で森の音を聞き、匂いを楽しむナイトハイクへ行つたこと也有つた。

町内の活動も忙しく、東京への

通勤はさぞ大変では？と尋ねると、まったく苦ではないという。

「金曜の夜から、リゾートにいる

おせつかいすることがいっぱいあるのよ。

05
主婦
山田操さん
misao yamada

かつての宿場町、神明町の行事やお祭りに現れ、その場をパッと明るく。

すてきな「おせつかい」で新しくやってきた移住者と地域の人をつないでくれています。

山田操さんといえば、そのトレードマークは、ほおかぶり。「駅でね、お客さんと待ち合わせる時に誰だかわからないじゃない?だから、手ぬぐいをかぶつているから、見つけてって言うの」まるで少女のように、天真爛漫、可愛らしい口調で話す操さん。江戸時代、宿場町大磯の中心として栄えた神明町で生まれ育ち、地域のことを知り尽くしている。

昔から続く文化を大切にしているから、見つけて「おせつかい」で、神明町内の行事やお祭りとあらば、必ず現れる。その場が円滑

に回るよう、当日の人集めから、お茶出し、テーブルの用意、洗い物など、自分に出来そうなことを「ゲットゲット」として動き回る。ノリノリで踊り、盛り上げる。「昔はね、宿場町があつて、芸者さんがいて、花魁がいて。そういう華やかで歴史的なものがあるから、大磯人は惹かれるよね」

そう大磯の歴史を嬉しそうに語る操さん。毎年11月には、宿場町として、にぎわっていた頃の雰囲気を楽しめる「宿場まつり」が開

かれ。名物「花魁道中」では、女装した男性が歩き、話題を呼んでいる。きっかけは、大磯中学校の同窓会で、おもしろそだだからうようよと盛り上がったこと。今で24回目を迎える。

また、町の人に身近なイベントのお手伝いをするNPO法人「大磯だいすき俱楽部」では、地元の機会の合間で仲間と世代を超えて活動している。もちろん、操さんも立ち上げメンバーのひとり。「大磯だいすき俱楽部」では、地元の企業やお正月に開催される「左義長まつり」の支援など、新しく始めるよう助け舟も出してくれる。

「例えばお祭りの時には、手伝つて、おもしろいでしょう?」

元の人が主体のお祭りも、新旧問わず力をそそぐ。都会から引っ越してきた移住者や大磯に引っ越したいと考えている人には、「町になら、大磯が恋しくなり、2年でリターン。帰る時に旦那さんを射止め、一緒に大磯へ。」

じめるよう助け舟も出してくれる。

「おせつかい」が大好きな操さん。もうつたり、食べ物で釣るのも早

く、なんて言って仲間に入って

きて、おせつかいが好きな操さん。それがかけてくれるひと言は、「地域

いわね(笑)」。そういう町づくりで、おもしろいのでしょうか?

とにかく、地域に溶け込む魔法かもしれない。



山田操
1946年、大磯生まれ。『大磯だいすき俱楽部』監事、地域のたまり場『海鈴』メンバー。高校卒業後、横浜に住んでみないと暮らしてみると、大磯が恋しくなり、2年でリターン。帰る時に旦那さんを射止め、一緒に大磯へ。



(上・右上) おせつかいをするのは「私も人に支えられているからよ」と操さん。(右下) イベント出店時の『大磯だいすき俱楽部』の様子。(左)『大磯宿』のにぎわいを感じさせてくれる『宿場まつり』。



寺本忠男／寺本千秋
忠男さんは1970年、大阪生まれ。サプリなどを扱う都内の健康食品会社で商品の企画を担当。東京住まいの2008年から『大磯だいすき俱楽部』メンバー。千秋さんは1969年、秋田生まれ。都内の自然食品を扱う会社に勤務する。

人と自然に魅力を感じて大磯へ引っ越しました。

海の香り、山の匂い……大磯駅に降りた瞬間にほっこりとする。

「終の棲家をやつとみつけた。そういう感じがありました」

と語るのは、2011年、夫婦で大磯へと引っ越しした寺本忠男さん。勤務先が東京なので、鎌倉や葉山も、候補地として訪れてみたものの何かが違った。

かつてニヨーヨークに住んだことがあった。ジャズが大好きで、音楽の本場で仕事をどうしてもし

たくて、サラリーマンを辞め、音楽出版社でインターネットのような形で働かせてもらった。けれど、ビザの更新などが難しく、最終的に

は帰国し、東京で暮らし始めた。

東京では江東区に住み、あちこち出かけ、楽しかったものの、「ここ

ずっと暮らすのはちょっと違うな」そんな風に感じていた時、大磯に出会った。

そのきっかけは、「大磯だいすき俱楽部」の代表 富山昇さん。忠

男さんが広告代理店で働いていた頃、富山さんが新聞社の営業でやつてきた。会社では、「すごい笑顔のおじちゃんがいる」と評判

だった。仕事関係者でありながら、

「おもしろいから大磯へ一度遊びにおいでよ」と誘われ、それを機に大磯よく遊びに行くようになります。富山さんの同級生の集まりにおじゃますると、そこにはさまざまな職業の人があった。

「一流企業の社長クラスの方も漁師さんも、60歳で定年を迎えた後、みんな仲間で楽しそうに過ごしていました。その姿を見て、いつかこうなりたいと感じました」

まず藤沢に住んでみて、楽しかったら、大磯もいいかなと思うようになり、2年間住んでみると、非常に楽しかった。そこで、大磯で本格的に家を探し始めた。たまたま自分たち好みの住宅も見つかり、どんどん拍子で引っ越して、休みの日には、ふたりそろってJ.A.が直接卸している大きな市場など、周辺の直売所へ行く。自然食品会社で働いている千秋さんは、本当に新鮮なお野菜ばかり。しかも安い。安すぎる! 東京だと4倍ぐらいするのに。いつもそんなことばかり話しています」

忠男さんは、「おせつかい」と笑い、忠男さんと顔を見合

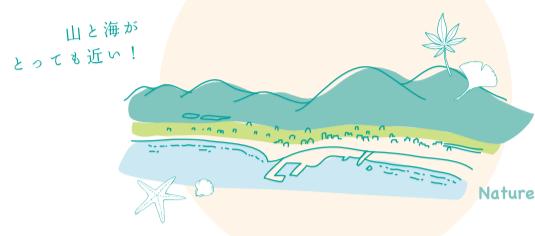
せた。氣取らず、自然体。大磯を満喫しているように見えた。



大磯暮らしを楽しむための9つの価値観

『大磯町新たな観光の核づくり推進協議会』で考えました！

1. 自然との共生



2. つながり



3. 文化の継承



4. 地元優先



5. 独自性



6. 手づくり



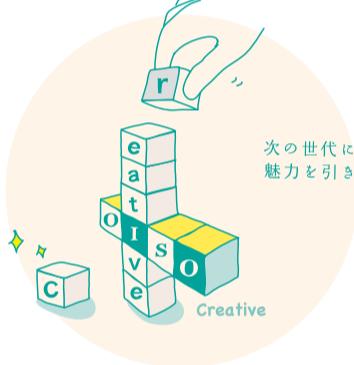
7. 地産地消



8. 歩いて楽しい



9. 創造



大磯町新たな観光の核づくり推進協議会

この協議会は、大磯町の観光関連 22 の団体や企業を中心となった組織です。大磯町における観光とは、町内で暮らす人々が感じる町の魅力を自ら発信して、その発信をきっかけに大磯町を訪れる人を増やしたり、訪れた方々がその魅力に触れることで、将来的に移り住みたいなと思っていただけるような、そんな町を目指して、日々活動に取り組んでいます。

協議会メンバー紹介

東日本旅客鉄道株式会社、大磯プリンスホテル、大磯飲食店組合、大磯逸品の会、(公財)神奈川県公園協会・湘南造園(株)グループ、NPO法人大磯だいすき俱楽部、NPO法人西湘をあそぶ会、NPO法人大磯ガイドボランティア協会、大磯町漁業協同組合、学校法人東海大学、神奈川中央交通株式会社、おおいそオープンガーデンホーム運営委員会、大磯港みなとまちづくり協議会、星槎湘南大磯キャンパス、大磯町区長連絡協議会、神奈川県湘南地域県政総合センター、(株)ランナーズ・ウェルネス、神奈川県平塚土木事務所、湘南農業協同組合、(公社)大磯町観光協会、大磯町商工会、大磯町
以上 順不同

『大磯暮らし』をご覧の皆さまへ

このフリーペーパーは、大磯で生活し、地域でさまざまな活動に関わっている方々を通じて、大磯らしい暮らしを発信するために制作しました。今回、紙面で登場いただいたのは、『大磯暮らしを楽しむための9つの価値観』と深い関わりをお持ちの方々です。ご覧になった皆さまが、改めて大磯町の魅力に気づいていただいたり、また、これをきっかけに大磯町に興味を持ち、訪れていただけると嬉しいです。

大磯町を知ろう！

(平成29年1月1日現在)

人口



31,522 人

世帯数



12,412 世帯

面積



17.23 km²

アクセス

(JR東海道本線)



約 40分

横浜 → 大磯

約 55分

品川 → 大磯



<発行> 大磯町新たな観光の核づくり推進協議会

事務局: 大磯町 産業環境部 産業観光課

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯1398-18 TEL.0463-61-4100(内線334) Eメールアドレス:kankou@town.oiso.kanagawa.jp

●企画・編集・デザイン 森川正信 ●取材・文 上浦未来(P2~7) ●撮影 濱津和貴(表紙、P2~3) ●タイトル題字 つきやま Arts & Crafts